

講義レポート（第7回）「国外調査（オレゴン州ポートランド）」

福井市 宮川 和也

2014年8月23日（土）～8月29日（金）

国外調査として、オレゴン州ポートランドに滞在し、JaLoGoMa トレーニングプログラムに参加しました。プログラムを通じて感じたことは、以下のとおりです。

1 ポートランド市の印象

まず、道路や歩道が広く、ゆったりとした造りで、風通しのよい都市であるとの印象を受けました。町を歩く人も好意的な雰囲気のを漂わせ、面識の無い人同士が目を合わせ、挨拶を交わしていました。

「この町の人々は、自分たちに興味を持ってきている。受け入れてもらえる。」と、すぐに思いました。日本では、親しい人同士の間には感じられない電波のようなものが、町全体に漂っているように思いました。

2 都市の作り

自転車専用レーン、MAXなどの公共交通機関の駅、大学の建物までもが、強い主張をせず、都市の風景に自然に溶け込んでいました。また、日本のように塀に囲まれた家はなく、町全体の印象として閉鎖的な「壁」「バリア」が少なく感じられました。とにかく、見通しのよい町なのです。

また、都市部でも大きな街路樹に囲まれており、「都市を作ってから木を植えた」のではなく、「森の中に木を残しながら都市を作った」ように感じました。都市と自然のバランスがちょうどよく、便利さと自然環境の両方を享受できる町でした。ちょうど乾季で、乾燥している気候のせいも、木陰に入ると非常に快適で、街路樹のありがたさを実感することができました。

3 多様性について

今回の研修において、「住民参画」について考える際は、絶えず「多様性」を意識させられました。日本にいる時の感覚では、「なぜマイノリティの意見を重視しなくてはいけないのか」という疑問が生じやすいのですが、ポートランドの環境に身を置くと、自分もまたマイノリティであることに気が付き、マイノリティに優しい社会のありがたさが良く分かります。

日本は、多様性を「受け入れる」ことを議論している段階の社会であるのに対して、ポートランドは、多様な人間が集まり、共に生きるということを前提として、多様な生を「生かそうとしている」社会なのだと感じました。ポートランドの懐の深さ、優しさを感じ、研修中も「少し個性を出してもいいかな」という気分になれたのは、そういった都市の雰囲気にも影響を受けたのだと思います。

4 思っていたのと少しニュアンスが違った言葉

(1) リーダーシップ

住民参加のレベルを上げるには、行政が、多様なコミュニティに働きかけること。そして、コミュニティのリーダーを見つけ、育てること … というお話を、講義で何度か聴く機会がありました。

では、肝心のリーダーには、どんな人になるのか？それは、誰もがリーダーになる可能性と才能を持っているし、声の大きい人とは限らないとのことでした。

日本で「リーダー」と言われたとき、私はいつも「人を強く引っ張る」リーダーを想像していました。しかし、実際のリーダー「人がついていきたくくなるような」人ではないかと感じました。リーダーには「ビジョン」「信頼」「奉仕の精神」「勇気」などが必要とのことでした。

ポータランドのように「多様性を生かそう」としている社会は、リーダーの育成にも適した環境ではないかと思いました。

(2) パートナーシップ

パートナーシップを構築するには何が必要か？それこそが個人のリーダーシップなのではないかと気が付きました。

(3) コミュニティとコミュニケーション

一口に「コミュニティ」と言っても、アメリカと日本とでは、「コミュニティ」の姿が異なると感じました。それは、アメリカと日本では、コミュニケーションの作法に違いがあるように思われるからです。

例えば、日本の地縁的コミュニティは、参加は義務的で、リーダーも持ち回りのことが多いです。自由な意見交換による合意形成ではなく、決断を代表者に一任するケースもしばしば見られます。

日米の差異を感じる部分について、しっかり考察し、各コミュニティにある「コミュニケーションのスタイル」を見極めることが、日本で「住民参加」を円滑に進めるために必要なのではないかと感じています。また、ワークショップのように、主催者側が、場のコミュニケーションスタイルをデザインできる場合は、日本人の特性を考慮し、注意深くデザインすることが大切ではないかと感じます。

日米のコミュニケーションスタイルの際については、今後考察していきたいと思いますが、「都市と農村」「ダンスと盆踊り」など、比喩的なモデルを用いながら考察するのが有効ではないかと思っています。

5 心に残った言葉

(1) 信頼関係はコミュニケーションの成果物

特に「よい質問」の大切さを意識した1週間でした。PSUの皆様から、自分

の頭を整理できるような建設的な質問を沢山いただいたと感じています。また、ポートランドの長期計画の入り口にも、考え抜かれた「4つの質問」がありました。

相手の話に耳を傾けることが信頼関係につながるのであれば、その最初の一步目は「よい質問」なのだということを、忘れないでいたいと思います。

(2) ファシリテーターの役割

ファシリテーターの役割は「時間を守る」「全員を参加させること」「包括的な視点を提供すること」だとダンさんから習いました。

ごみ屋敷のことを話し合った「イノベーション・ラボ」では、出た意見を「内からの視点と外からの視点」に分類するという考え方を教えていただいた瞬間、頭が整理され、以降、とても発言がしやすくなったのを覚えています。

(3) 住民と行政との関係はダンスの関係

国内研修で、チップスさんに習った考え方です。アーバングリーンのケースは住民から誘ったダンス、ポートランド長期計画のケースは行政から誘ったダンスだと思ってケースを味わいました。

両方のケースとも、ダンスに誘うのがとても上手。自分だったら盆踊りになってしまうかも？などと考えていました。

(4) 住民参加のスペクトラム

今回の研修で、頭を整理するための3つのモデル（リーダーシップモデル、ガバナンスモデル、IAP2 住民参加のスペクトラム）を教えてくださいました。3つとも素晴らしいモデルでしたが、特に仕事で意識したいと感じたのは「住民参加のスペクトラム」です。

自分が仕事をするうえで、どこを狙っていくのか。Inform か、Consult か、Involve か、Collaborate か。目標を明確にして仕事に臨むようにしたいと思いました。

7 最後に

私は「コミュニケーション」に苦手意識があるのですが、ポートランドで1週間を過ごし、やはりコミュニケーションは大切なのだとあらためて実感しました。

ポートランドでお世話になった先生方、JaLoGoMa のスタッフの皆様の、オープンで心温まるコミュニケーションは、私にとってお手本と思える、心を打たれるものでした。

ポートランドでは様々なお手本に出会いました。その本質の理解に努め、少しでもお手本に近づけるように頑張っていきたいと思います。